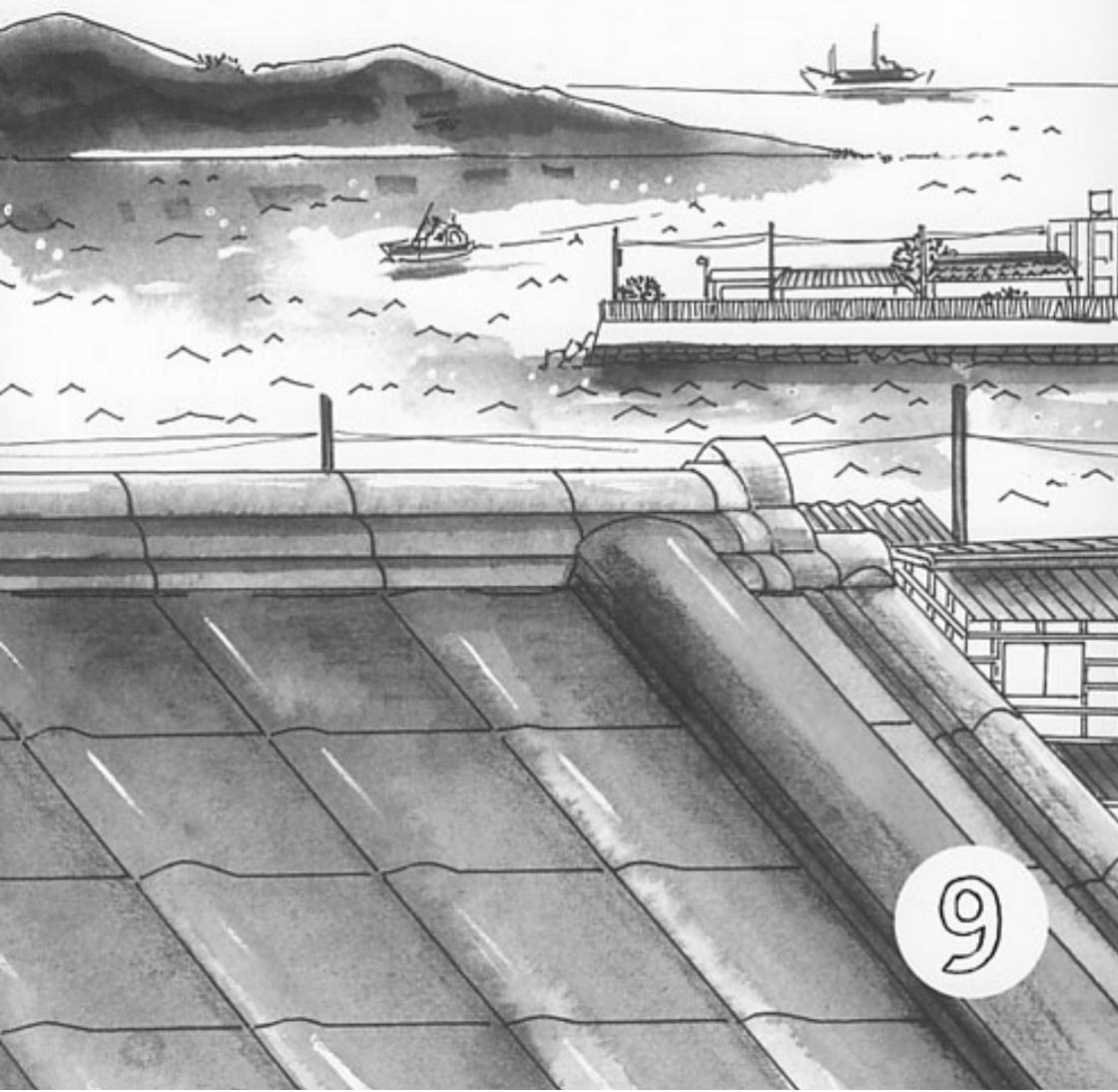


令和2年9月5日発行(毎月5日1回発行)
第60巻9月号(通巻734号)

風土



9

深入りしすぎ振りかへる葡萄山

（句集『四温』より昭和四十九年作）
 桂郎師は八月三十一日より山梨市の武井医院に静養のため入院しますが、外出自由で十月十八日まで医院にとどまりました。「裾に人一山葡萄棚覆ふ」もその頃の句です。この句で山全体が葡萄で覆われているのが解ります。葡萄園を進んでいき、あまりの広大さについて振り返り、来た道を確認かめているのです。外出自由といっても少し不安になったのかもしれませんが。

ありがたや古酒一盞に震ふ手も

（句集『四温』より昭和四十九年作）
 この句には「九月二十八日、馬酔木同人会にて思ひもかけず秋櫻子先生・遷子氏に見ゆ。われもまた病めば」の前書があります。桂郎師は「馬酔木」の同人でもありました。「風土」主宰としての仕事が日々ありますので、久しぶりの同人会参加かもしれません。「ありがたや」がそれを伝えています。この時秋櫻子は八十歳の高齢、遷子は癌を患っていました。桂郎師も肺炎をおこして度々入院しています。「われもまた病めば」なのです。

貴椿うぬのおくやまけふこえて

（句集『波の花』より平成十四年作）
 この句には「第四十一回俳人協会賞受賞祝賀会椿山荘にて」の前書があります。器師は句集『貴椿』で平成十三年の俳人協会賞を受賞しています。桂郎師が昭和三十六年に第一回の俳人協会賞を受賞していますから、桂郎師にやっと並んだという感慨もひとしおだったでしょう。「うぬのおくやま」は無常な世を脱することの難しさを深山に喩えて言いますが、「けふこえて」にその喜びが表れています。

涼風を村いつぱいに櫛立つ

（句集『波の花』より平成十四年作）
 甲斐は境川の蛇笏・龍太の「山盧を訪れた時のものです。この句は、龍太の句「どの子にも涼しく風の吹く日かな」を下敷きにしており、また「櫛」は「山盧」の後ろの大櫛のことで、「山盧」への挨拶になっています。同時に「一と畝は山盧へつづく芋風」という句も作っていますが、「芋風」は蛇笏の「芋の露連山影を正うす」を想起させます。

若竹の南うみを

万緑の芯たり千年榧大樹
万緑におぼれんとして塔ひとつ
磴百をひと飛び梅雨の蝶なれど
黒南風の上枝うかがふ蔓の先
ざりがにの逃げ足速き泥けむり
梅雨なまず畦はらばひて次の田へ
睡蓮の精にまみえん膝を折る
ねぢ花を蟻まつすぐに駆けのぼる
袖に疣こそげて齧る青胡瓜
鬼百合をぐいと引き寄せ嗅ぐ女
月涼し電柱歩きだしさうな
若竹の七畳小屋へ稿抱へ

悼田村すゝむ兄・草創期の「風土」の編集に携わりて



竹間集

同人作品



雲の峰

田中佐知子

これよりは空海の山蛭追ふ
胸元を指し来蛭のはたと逸れ
蛭の乱舞その夜の眠られず
源流は南アルプス新茶摘む
修験道折れてにはかに滝の音
眼前に神坐す島や天草干す
雲の峰牧の起伏に馬柵の添ひ

ほととぎす

小林輝子

一人空く卓上に蠅追はざりし
夫居らず夫の居らずとほととぎす
西方へ夫送る朝薯の花
散りぎはの紅ほんのりと山法師
十葉の花のびつしり濡れ山河
山裾のなべてふくるる栗の花
露涼し夫露の世を去りてより

鮎料理

中村洋子

水音の貴船に待てる鮎料理
追ひかけて母に被せる夏帽子
窯変の火色涼しき備前焼
声明の聞こゆる寺の蟻地獄
傘しづく払ひて書肆へ桜桃忌
先頭が乱れてしまふ蟻の列
空豆のふくれつ面を取り出だす

蛭

火

橋添やよひ

蛭火の恋擦れちがひ行き違ひ
「山動く」てふ晶子歌碑青あらし
青嵐明智城址の穴太積
雨雲が紫陽花にいろ置いてゆく
飲み会も句会にも出ずところてん
六月の川風受けてゐて飽かず
木漏れ日の巢籠もりとなるハンモック

スクワット

柿沼盟子

古茶熱く午後の仕事に備へをり
木洩れ日にあやされてをる落し文
持ち帰り弁当多彩麦の秋
ハンドジェルさらさら乾く薄暑光
文字摺の雨滴とどめぬ螺旋かな
友釣りの互庭内ひに大き鮎の口
スクワットめきてきたりぬ草むしり

ペンギンぐみ

浅田光代

走り梅雨まだあどけなき蔓の先
一団のふいと消えたる青芒
船頭の棹休めぬる浮巢かな
船虫の散つて眼の残さるる
納豆の箸取り落とす梅雨の底
栗の花ふめば脈打つ土踏まず
ふさなりのペンギンぐみのミニトマト

白木槿

高村令子

鉦打つて始まる一と日白木槿
計画も打算も無くて梅雨籠
気を抜けば崩るる齡沙羅の花
幼な児の授乳は無心風薫る
杖の歩やことごとく田の植ゑられて
佇むや植田の夕日終るまで
無人駅また無人駅鳥渡る

あめんぼ

土井 三乙

郭公のこゑのひとつは木霊とも
我が影の内より飛んで黒揚羽
夕立去る羽虫一匹窓に残し
辞書何度も引いては忘れクレマチス
珈琲の香のして昼寝もう少し
年ごとに減りゆく蛍との時間
あめんぼに雲は踏むべくありにけり

樟若葉

小林共代

樟若葉鳥居鎮めてしまひけり
たまきはる幣の白さに半夏生草
扁額に開運祥福みどりさす
白鷺草今翔たんとす醤油倉
梅雨きざす醤油の町の舟着場
忍び返しめぐらす塀やひかた吹く
安房の宿夏蜜柑風呂にもてなされ

草引く

林 いづみ

百万石箔座に外すサンガラス
城垣の出窓三面夏燕
かはほりや行き交ふ笛吹川薄暮
禅林の紫陽花の名カメレオン
塀ぎはを灯す十葉昏れんとす
ここ三日夏鶯に訪はれをり
草引くや朝の十分毎の嵩

夏至日食

岩木 茂

柄物のマスクに合はず更衣
サーファアのCDラジカセよりザン
縄文遺跡夏至日食に翳り始む
一滴のしづく蛍となりて翔つ
滝浴びて鉄気に染まる石不動
一本の天柱として滝仰ぐ
杉山の闇の放てる黒揚羽

山河集

同人作品



南うみを選

夏霧にぬれて龍太の竹箒
水音を絶やさぬ山盧夏木立
夏山や「蛇笏君」てふ普羅のこと
藤椅子や蛇笏龍太の亡きあとも
もてなしの山盧龍太の蚊遣香

雨宮 桂子

五月闇余白だらけの手帖閉づ

森田 節子

南吹くドックに巨大テント立つ
水底に神代杉や風青し
白鷺の片足挙げて動かざる
鮎走る相模の水の輝けり

指揮棒の先の残像夏燕
魚呑んで海鵜の首の淋しさよ
膨らんで飛び立つばかり燕の子

高橋まき子

水含む風吹いてくる虎耳草
前山に一所明るき今年竹

岡本 尚子

これよりは愛宕神域鮎の茶屋
鮎宿のいぶし色なる愛宕札
父の忌や終の食事の鮎雑炊
沢音にこころほどけば飛ぶ蛍
新樹光納まりきらぬ空のあり

奥田 茶々

河骨や和菓子のやうな花掲ぐ
星に手の届く山荘端居かな
蟻地獄無音の刻のながれゆく
長き髪ほどく花藻の流れかな
夏草や耳しか見えぬコーギー犬

小名浜湾

森高 武

両端に貝塚を置く海霧の湾
七変化貝塚跡の展望塔
展望塔より万緑の陸と海
白南風や水脈一線に巡視船
煙突と巨大クレーン夏の海
鰹船網は二籽と言ふ漁師
網仕舞ふ鰹漁師の二十人
夏の雲埠頭に網の堆く

自粛緩和の子ら公園に汗の顔
海眺め一人埠頭に食ふアイス
海霧の浜弁当に赤いウインナー
花合歓や昼にネオンの港街
梅雨晴のショッピングモール人の湧く
鰹半身買ひいそいそと帰宅しぬ
夏燕原油タンクは口を開け
褐色の工場並ぶ出水川
工場の薬品臭や梅雨深し
満ち潮の梅雨の河口の逆流す
夕風や鴉は吾を一瞥す
溶けあふや海と岬と梅雨空と

風土独語／南 うみを



夏霧にぬれて龍太の竹箒 雨宮 桂子

甲斐は境川の「山盧」を訪れた折の作品です。「山盧」は蛇笏・龍太の住まいであり、私たち俳人にとってメッカでもあります。山盧から後山へ至るまで竹林があり、龍太の散策の場でもありました。そこに龍太手作りの「竹箒」が、掛かっているのです。日常を大事にする龍太の俳句精神の象徴のようでもあります。

田を植えて眠りこけたる村ひとつ 渡辺 やや

この句のポイントは「眠りこけたる村」です。村じゅうの田植が終わり、にぎやかだった田も今は早苗が戦いでいます。村人は田植の疲れを癒すため家に籠って村中静かです。田植を共同で行っていた頃を思い起こさせます。

水底に神代杉や風青し 森田 節子

「神代杉」は太古の火山灰に埋没した杉材で、貴重なものです。青々とした木立の中の池でしょうか。悠久の時を「青嵐」が吹き渡っていきます。歴史の深みのある作品です。

枇杷たわわ明るき午後の雨しきり 原 博美

この句は枇杷が熟れる頃の季節感と明るさを描いています。た

風土集



南うみを選

わわに実った枇杷に雨が降っていますが、枇杷の色に雨までが輝いているのです。海辺の村の静かな午後の景色です。

魚呑んで海鵜の首の淋しさよ 高橋まき子

この句は鵜飼の海鵜か、自然の海鵜か判然としませんが、「首の淋しさよ」から鵜匠に操られている鵜を想像します。鵜を呑み込んで、そのたび吐き出さねばならない海鵜の首なのです。

背から食ひ腹から食らふ申の鮎 新妻 洋子

瀬を泳ぐように申に刺した焼鮎です。それを貧るように食べる様子を「背から食ひ腹から食らふ」と表現しました。「喰ひ」「食らふ」の言葉にリアルさがあります。

くちなしのこの世の染みに触れはじむ 根岸 善行

「くちなし」の花の咲き初めの清新の白と香気は「この世」のものとは思えません。時がたち萎む頃には淡黄色に変わります。作者はそれを「この世の染みに触れはじむ」と表現しました。「くちなし」の清浄さがいやがうえにも際立ちます。

鮎宿のいぶし色なる愛宕札 岡本 尚子

「愛宕札」は愛宕参りでいただく「火伏の札」で、京都の愛宕山の七月三十一日の「千日詣」の札はご利益があります。麓の清滝に残っている鮎宿を訪れた作者は、「いぶし色」の愛宕札に愛宕山と清滝の歴史を感じているのです。

田を植えて眠りこけたる村ひとつ 宇治 渡辺 やや
水鏡崩して清水呑みにけり
不意打ちに倒れてみせて水鉄砲
草刈りや雨の匂ひに追はれつつ
お絞りにレモンの香り梅雨の明
枇杷たわわ明るき午後の雨しきり 南 原 博美
十葉の匂ひ摘みたる雨上がり
朝焼けの音無きドラマ独り占め
蜘蛛の囀に今日また触れて乱れ髪
一筋の風通り抜け汗拭ふ
背から食ひ腹から食らふ申の鮎 いわき 新妻 洋子
参道へ導く灯白紫陽花
濃紫陽花触れて一夜の雨の落つ
薬師堂の山より滴る御薬水
自転車漕ぐ子に強き走り梅雨

蛭や源氏の闇と平家の闇 上尾 根岸 善行
くちなしのこの世の染みに触れはじむ
富士の風筑波の風や梅雨晴るる
太陽の芯は暗闇揚羽蝶
いんげんのグリーンカーテン窓から獲る
一面の紫陽花を過ぎ日本海 秋田 石井美智子
幼児の団扇の遊び切りもなし
畝まはる麦藁帽子だけ見えて
向日葵に太郎次郎と名付けをり
サイダー飲む爪に畑の土少し
夏草や缶蹴りちやんばら知らない子 千葉 上村 葉子
父の日やちの背丈は知らぬまま
サングラス赤きマニキュアつけやうか
ぐらつきし乳歯こはごは食む氷菓
雨を行き水無月を食む夏点前